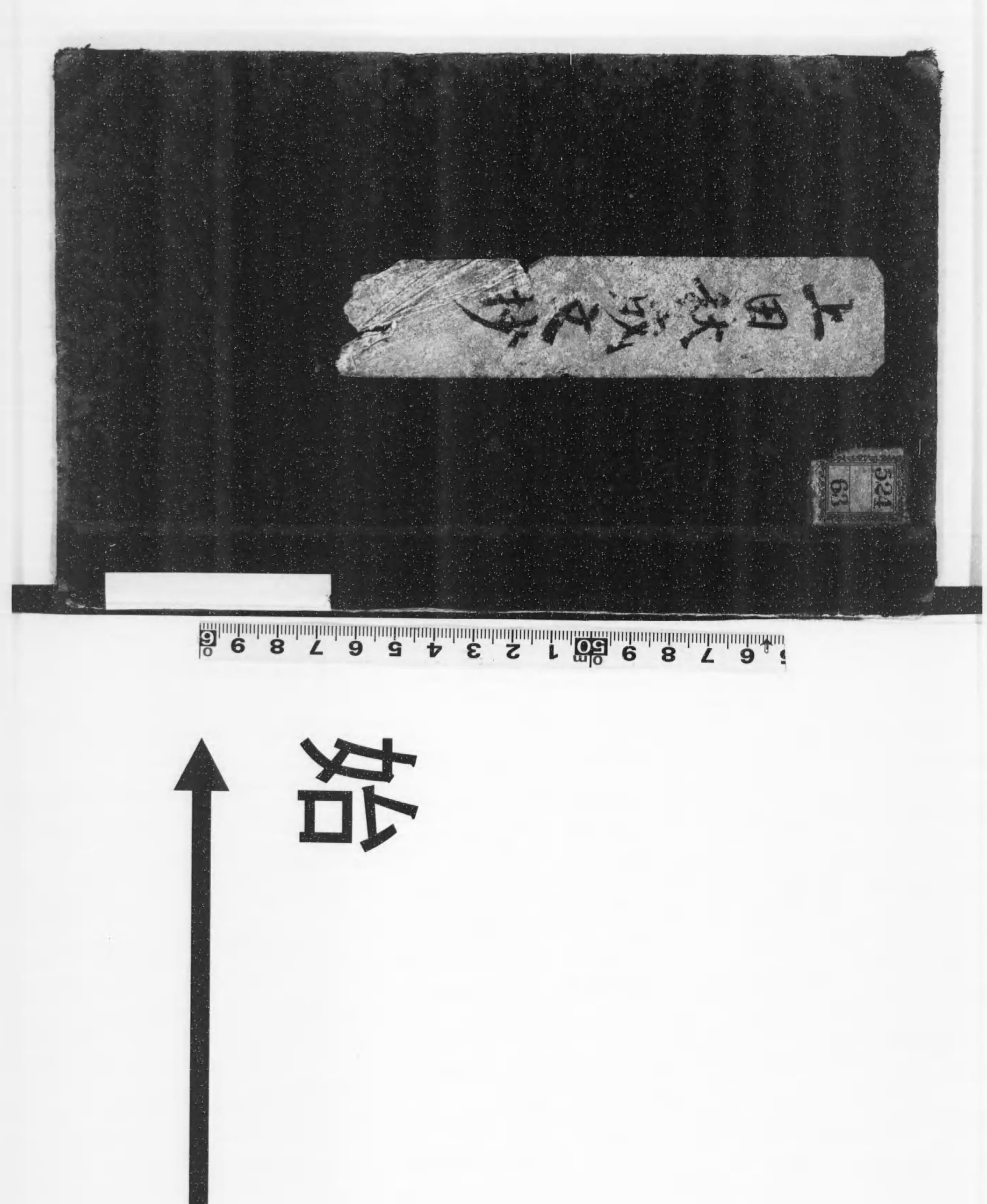
524
63

上田秋成文抄

文學士
鈴木敏也編

東京 斯文書院 發兌

124-63

上田秋成文抄

廣島高等師範學校教授
文學士
鈴木敏也編

東京 斯文書院 發兌

大正
13.4 15
内入

空中方觀作
陶　像

西福寺
墓碑

自　畫　賛

上田秋成。 大阪の人、通稱は東作。無腸、餘齋、鶉居、剪枝畸人等の號がある。父母を詳にせず、物心つく四歳の頃には堂島の商人上田氏に養はれてゐた。初め俳諧を几圭に學び、後蕪村を友とした。明和三年(三十三歳)の時、鼠洞門下の加藤美樹が大阪城番として來たのに就て國學を修めた。同五年には雨月物語を書いた。同八年に火災にかゝつて家産を失つたため、村居して醫を學び、四十二歳で大阪に開業した。これは爾後十餘年引續いたが、餘暇には學藝の方面にいそしみ、歌人學者として漸く世に認められた。五十五歳ある動機から醫を廢め、長柄里に隱退した。寛政五年(六十歳)京都に上り、畫家松村月溪、歌人小澤蘆庵、儒者村瀬栲亭等と往來した。寛政九年妻(瑚連尼、植山氏)を失つてからは狷介孤獨の氣性はいよ〳〵荒み、世を嘲り俗を罵りつゝ、文化六年六月二十七日七十六歳を以て逝いた。著作には冠辭考續貂、楢の柚、よしやあしやの如き研究的のものもあるが、雨月物語、春雨物語、藤簍册子、癇癖談の如き創作方面にその長所が覗はれる。又、膽大小心錄は忌憚なき自己告白であり、辛辣な社會諷刺の隨筆である。

雨月物語。 五卷、短篇九篇(白峯、菊花の約、淺茅が宿、夢應鯉魚、佛法僧、吉備津釜、蛇性の淫、青頭巾、貧福論)からなる怪異小說集である。豐麗にして幽妙な筆致は內容の幻妖とよく融合して、文學史上に異彩を放つてゐる。彼の傑作たるのみならず日本文學の中の逸品である。(明和五年作、安永五年刊行)

つゞらぶみ。 五卷。秋成の歌文集である。こゝに採つた「劍の舞」は靜御前が鶴ケ岡社頭の演舞を題材とした小品である。(文化三年刊)

秋成遺文。 藤井乙男博士が秋成の歌文で未だ印行せられてゐないものを蒐集出版せられたものである。その內より天明八年の京都大火を記した「かぐつちの荒び」と、寛政十年の「山霧記」の一節とを拔萃した。(大正八年刊)

上田秋成文抄

目次

一、淺芽が宿(雨月物語)……一
二、夢應の鯉魚(雨月物語)……一三
三、劍の舞(つゞらぶみ)……一八
四、迦具都遲のあらび(秋成遺文)……二三
五、狐の祟(秋成遺文)……二七
六、落葉籠(雜抄)……三二
一、高野の奥……三二

目次

二、荒寺……二四
三、森の怪……三五
四、梶枕……三七
五、圓位……三七
六、右府……三八
七、まろうど……三九

上田秋成文抄

一 淺茅が宿

足利染
下野の足利より生産する絹布

下總の國葛飾郡眞間の郷に、勝四郎といふ男ありけり。祖父よりひさしくこゝに住み、田畠あまた主づきて家豐に暮しけるが、生長て物にかゝはらぬさがより、なりはひをうたてき物に厭ひけるまゝに、家貧しくなりにけり。さるほどにうからおほくにも疎んじられけるを、口をしきことに思ひしみて、いかにもして家を興しなんものをととかくにはかりける。其頃雀部の曾次といふ人、足利染の絹を交易するために、年々京よりくだりけるが、此郷に氏族のありけるを屢々來訪ひしかば、かねてより親しかりけるまゝに、商人となりて京にまうのぼらんことを頼みしに雀部いとやすくうけがひて、いつの頃はまかるべしときこえける。かれ

がたのもしきをよろこびて、殘る田をも販つくして金に代へ絹素あまた買ひ積みて京にゆく日をもよほしける。

勝四郎が妻宮木なるものは、人の目とむるばかりの容に、心ばへも愚ならずありけり。此度勝四郎が商物買ひて京にゆくといふをうたてきことに思ひ、言をつくして諫むれども、常の心のはやりたるにせんかたなく、梓弓末のたづきの心ぼそきにも、かひ〳〵しく調らへて、其夜はさりがたき別をかたり、「かくては、たのみなき女心の、野にも山にも惑ふばかり、物うきかぎりに侍り。朝に夕にわすれたまはで、速く歸りたまへ。命だにとは思ふものゝ、明日をたのまれぬ世のことわりは、武き御心にもあはれみたまへ」といふに、「いかで浮木に乘つも、しらぬ國に長居せん。葛のうら葉のかへるは此秋なるべし。心づよく待ちたまへ」といひなぐさめて、夜も明けぬるに、鳥が啼く東を立出で京の方へ急ぎけり。

梓弓末のたづき　梓弓末のたづきは知られねども心は君によりにしものを（萬葉集十二）

命だに　命だに心に叶ふものならば何かわかれの悲しからまし（古今集）

鳥が啼く　東の枕詞

此年　享德三年

享德　別花園帝の御宇

成氏　鎌倉管領持氏の子、小字永壽、明應六年死

管領上杉　憲忠

此年享德の夏、鎌倉の御所成氏朝臣、管領の上杉と御中放て、館兵火に跡なく滅びければ、御所は總州の御味方へ落ちさせたまふより、關の東忽に亂れて、心々の世の中となりしほどに老ぴたるは山ににげかくれ、わかきはいくさぴとにもよほされ、けふは此所を燒きはらふ、明日は敵のよせ來るぞと、女わらべ等は東西に逃げまどひて泣きかなしむ。勝四郎が妻なるものも、いづちへも遁れんものをと思ひしかど、此秋を待てときこえし夫の言を賴みつゝも、安からぬ心に日をかぞへて暮しける。秋にもなりしかど風の便りもあらねば、世とともに憑みなき人心かなと、恨みかなしみおもひくづをれて、

身のうさは人しも告じあふ坂の夕づけ鳥よ秋も暮ぬと

かくよめれども、國あまた隔りぬればいひおくるべき傳もなし。世の中騷がしきにつれて、人の心も恐しくなりにたり。一人の婢女も去て、すこしの貯もむなしく、其年も暮ぬ。年あらたまりぬれども猶をさまらず。あまさへ去年の秋京家の下知として、美濃の國郡上の主、東の下野守常緣に御旗を給びて、下野の領所にくだり、氏族千葉の實胤とはかりて責るにより、御所方も固く守りて拒ぎ戰ひけるほどにいつ果べきとも見えず。野伏等はこゝかしこに塞をかまへ、火を放ち財を奪ふ。八州すべて安き所もなく、淺ましき世の費なりけり。

夕つけ鳥　雞の事。逢坂ノ夕つけ鳥もわが如く人や戀しき音のみなくらむ（古今集）

京家　足利將軍家

東常緣　武人にして歌人

千葉實胤　下總市川の城主

勝四郎は雀部に從ひて京にゆき、絹ども殘りなく交易せしほどに、當時都は華

涿鹿の巷　太古黄帝蚩尤と戰つてこれを擒にせし所

美を好む節なれば、よき德とりて東へ歸る用意をなすに、今度上杉の兵鎌倉の御所を陷し、なほ御跡をしたうて責め討てば、古郷の邊は干戈みちみちて涿鹿の巷となりしよしをいひはやす。まのあたりなるさへ僞おほきよがたりなるを、ましてしら雲の八重に隔たりし國なれば、心も心ならず、八月のはじめ京をたち出て、岐曾の眞坂を日ぐらしに踰えけるに、ぬすびとども道を塞へて、行李も殘りなく奪はれしが上に、人のかたるをきけば、是より東の方は所々に新關をするゑて、旅客の往來をだに宥さゞるよし。さては消息をすべきたづきもなし。家も兵火にや亡びなん。妻も世に生きてあらじ。しからば古郷とても鬼のすむ所なりとて、こゝより又京に引きかへすに、近江の國に入りて、にはかにこゝちあしく、熱き痛を憂ふ。武佐といふ所に、兒玉嘉兵衞とて富貴の人あり。これは雀部が妻の里なりければねんごろにたのみけるに、此人見捨ずしていたはりつも、醫をむかへて藥の事專なりし。やゝこゝち清しくなりぬれば、篤き恩をかたじけなうす。されど歩む事はまだはかゞしからねば、今年は思ひがけずもこゝに春を迎ふるに、いつのほどか此里にも友をもとめて、揉めざるに直き志を賞せられて、兒玉をは

寛正　後花園天皇の御字　畠山が同根の爭　政長、義就の爭

じめ誰誰も賴もしく交りけり。此後は京に出て雀部をとぶらひ、又近江に歸りて兒玉に身をよせ、七とせがほどは夢のごとくに過しぬ。

寛正二年幾内河内の國に畠山が同根の爭果さゞれば、京ぢかくも騷がしきに、春の頃より瘟疫さかんに行はれて、屍は衢につみ、人の心も今や一劫の盡くるならんと、はかなきかぎりを悲しみける。勝四郎つらつら思ふに、かくおちぶれてなす事もなき身の、何をたのみとて遠き國に逗り、由緣なき人の惠をうけて、いつまで生くべき命なるぞ、古郷に捨てし人の消息をだにしらで、萱草おひぬる野べに長々しき年月をすごしけるは信なきおのが心なりける物を、たとへ泉下の人となりて、ありつる世にはあらずとも、其あとをもとめて壠をも築くべけれと、人々に志を告げて、五月雨のはれ間に手をわかちて十日あまりを經て古郷にかへりつきぬ。

此時日ははや西に沈みて、雨雲はおちかゝるばかりに闇けれど、ひさしく住みなれし里なれば、迷ふべうもあらじと、夏野わけ行くに、いにしへの繼橋も川瀨におちたれば、げに駒の足音もせぬに、田畑は荒れたきまゝにすさみて、舊の道

繼橋　足の音せず、行かん駒もが　寓飾のまのの

つぎ橋やまゐ通はむ（萬葉集東歌）

もわからず、ありつる人居もなし。たま〳〵こゝかしこに殘る家に人の住むとは見ゆるもあれど、昔には似つゝもあらね、いづれが我住みし家ぞと立ち惑ふに、こゝ二十歩ばかりを去りて、雷に摧かれし松の聳えて立てるが、雲間の星に見えたるを、げに我軒の標こそ見えつれと、先づ嬉しきこゝちしてあゆむに、家は故にかはらでありぬ。人も住むと見えて、古戸の間より燈火の影もれてきら〳〵とするに、他人や住む、もし其人や在すかと心躁しく、門に立ちよりて咳すれば、内にも速く聞きとりて「誰ぞ」と答む。いたうねびたれど正しく妻の聲なるを聞きて、夢かと胸のみさわがれて、「我こそ歸りまゐりたれ。かはらでひとり淺茅が原に住みつることの不思議さよ」といふを、聞き知りたれば、やがて戸を明くるに、いといたう黑く垢づきて、眼はおち入りたるやうに、結たる髪も脊にかゝりて故の人とも思はれず。夫を見て物をもいはでさめざめとなく。

勝四郎も心くらみてしばし物をもきこえざりしが、やゝしていふは、「今までかくおはすと思ひなば、など年月を過すべき。去ぬる年京にありつる日、鎌倉の兵亂を聞き、御所のいくさ潰しかば、總州に避て禦ぎたまふ。管領これを責る事急

巫山の雲
楚の襄王夢に巫山の神女に會つた故事、巫山は巴川省にあり

漢宮の幻
漢の武帝、李夫人の死を悲しびて、反魂香をたきその姿を見たる故事

なりといふ。其明雀部にわかれて、八月のはじめ京を立ちて、木曾路を來るに、山賊あまたに取こめられ、衣服金錢殘りなく掠められ、命ばかりをからうじて助かりぬ。且里人のかたるを聞けば、東海東山の道はすべて新關を居て人を駐むるよし、又きのふ京より節刀使もくだり給ひて、上杉に與し、總州の陣に向はせたまふ。本國の邊は疾くに燒きはらはれ、馬の蹄尺地も間なしとかたるによりて、今は灰塵とやなり給ひけん。海にや沈みたまひけんとひたすらに思ひとゞめて、又京にのぼりぬるより、人に餬口て七とせは過しけり。ちかごろすゞろに物のなつかしくありしかば、せめて其蹤をも見たきまゝに歸りぬれど、かくて世におはせんとはゆめ〳〵思はざりしなり。巫山の雲漢宮の幻にもあらざるや」とくりごとはてしぞなき。妻涙をとゞめて、「一たび離れ參らせて後、たのむの秋より前に、恐しき世の中となりて、里人は皆家を捨て海に漂ひ山に隱れば、たまたまに殘りたる人は、多く虎狼の心ありて、幾たびか辛苦を忍びぬる。銀河秋を告れども君は歸りたまはず、冬を待ち、春を迎へても消息なし。今は京にのぼりて尋ねまゐらせんと思ひしかど、丈夫さへ宥さゞる關の鎖を、いかで女の越ゆべき道もあら

逢ふを待つ間　「人知れず逢ふを待つ間に戀死なば何に代へたる命とか云はむ」（後拾遺集）

秋ならねども　「里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる」（古今集秋）

じと、軒端の松にかひなき宿に、狐鶻鶻を友として今日までは過しぬ。今は長き恨みもはればれとなりぬることの嬉しく侍り。逢ふを待つ間に戀死なんは人しらぬ恨なるべし」と又よゝと泣くを、「夜こそ短きに」といひなぐさめて臥しぬ。

窓の紙松風を啜りて、夜もすがら涼しきに途の長手に勞れ熟く寢ねたり。五更の天明ゆく頃、現なき心にもすゞろに寒かりければ、衾かさねんとさぐる手に、何物にやさや〳〵と音するに目さめぬ。面にひやひやと物のこぼるゝを、雨や漏りぬるかと見れば、屋根は風にまくられてあれば、有明月のしらみて殘りたるも見ゆ。家は扉もあるやなし、簀垣朽頽たる間より、荻薄たかく生ひ出でて、朝露うちこぼるゝに、袖ひぢてしぼるばかりなり。壁には蔦葛延びかゝり、庭は葎に埋れて、秋ならねども野らなる宿なりけり。

さてしも臥したる妻はいづち行きけん見えず。狐などのしわざにやと思へば、かく荒れ果てぬれど故住みし家にたがはで、廣く造りなせし奥わたりより、端の方稻倉まで好みたるまゝのさまなり。あきれて足の踏所さへ失れたるやうなりしが、つら〳〵おもふに、妻は既にみまかりて、今は狐狸の住みかはりて、かく野

我身一つ云々　「月やあらぬ春や昔春なれども我身一つは我身にしてはもとの身にして」（伊勢物語）

さりともの歌　「さりともと思ふ心に慰みて今日まで世にも生ける命かな」（續後撰集　教忠）

らなる宿となりたれば、怪しの鬼の化してありし形を見せつるにてぞあるべき。若又我を慕ふ魂のかへり來りてかたりつるものか。思ひしことの露たがはざりしよと、更に涙さへ出でず。我身ひとつは故の身にして、とあゆみ廻るに、むかし閨房にてありし所の簀子をはらひ、土を積みて壠とし、雨露をふせぐまうけもあり、夜の靈はこゝもとよりやと恐しくも且なつかし。水向の具物せし中に、木の端を刪りたるに、那須野紙のいたう古びて文字もむら消して所々見定めがたき、正しく妻の筆の跡なり。法名といふものも年月もしるさで、三十一文字に末期の心を哀にも展べたり。

さりともと思ふ心にはかられて世にもけふまでいける命か

こゝにはじめて妻の死たるを覺りて、大に叫びて倒れ伏す。去りとて何の年、何の月日に終りしさへもしらぬ淺ましさよ。人はしりもやせんと、涙とゞめて立ち出れば、日高くさし昇りぬ。

まづちかき家に行きて主を見るに、昔見し人にあらず、かへりて「何國の人ぞ」と咎む。勝四郎ゐやまひていふ。「此隣なる家の主なりしが、わたらひのため京に

七とせまでありて、昨の夜かへりまゐりしに、既に荒れ廢みて人も住ひ侍らず。妻なるものも死りしと見えて壠の設も見えつるが、何の年にともなきに、まさりて悲しく侍り。しらせたまはゞ教へ給へかし。」主の男いふ、「哀れにもきこえたまふものかな。我こゝに住むもいまだ一とせばかりのことなれば、それよりはるかの昔に亡せたまふと見えて、住みたまふ人のありつる世はしり侍らず。すべてこの里の舊き人は兵亂の初に逃げうせて、今住居する人は大かた他より移り來たる人なり。只一人の翁の侍るが、所にひさしき人と見えたまふ。時時あの家にゆきて、亡せたまふ人の菩提を弔らはせ給ふなり。この翁こそ月日をもしらせたまふべし」といふ。勝四郎いふ。「さては其翁の栖みたまふ家は何方にて侍るや」主いふ。「こゝより百歩ばかりの濱の方に、麻おほく種ゑたる畑の主にて、其所にちひさき庵して住まはせたまふなり」と教ふ。勝四郎よろこびてかの家にゆきて見れば、七十ばかりの翁の腰は淺ましきまで屈まりたるが、庭竈の前に圓坐敷きて茶を啜り居る。翁も勝四郎と見るより、「吾主何とておそくかへりたまふ」といふを見れば、此里に久しき漆間の翁といふ人なり。

樹神
樹木の靈又天狗

勝四郎、翁が高齢をことぶきて、次に京に行きて心ならずも逗りしより、前夜のあやしきまでを詳にかたりて、翁が壠を築きて祭りたまふ恩のかたじけなきを告げつゝも涙とゞめがたし。翁いふ、「吾主遠くゆきたまひて後は、夏の頃より干戈を揮ひ出て、里人は所々に遁れ、弱き者どもは軍民に召さるゝほどに、桑田にはかに狐兎の叢となる。只烈婦のみ主が秋をちかひたまふを守りて、家を出で給はず、翁も又足塞ぎて百歩を難しとすれば、深く閉てこもりて出でず。一旦樹神などいふおそろしき鬼の栖所となりたりしを、稚き女子の矢武におはするぞ、老が物見たる中のあはれなりし。秋去り春來りて、其年の八月十日といふに死りたまふ。いとほしさのあまりに、老が手づから土を運びて櫃を藏め、其終焉に殘したまひし筆の跡を壠のしるしとして蘋蘩行潦の祭も心ばかりにものしけるが、翁もとより筆とる事をもしらねば、其月日を記すこともえせず。寺院遠ければ贈號を求むる方もなくて、五とせを過し侍るなり。今の物語をきくに、必ず烈婦の魂の來り給ひて、ひさしき恨を聞えたまふなるべし。復かしこに行きて念頃にとぶらひ給へ」とて、杖を曳て前に立ち、相ともに壠のまへに俯して聲を放て歎きつ

眞間の手兒女　萬葉集にこの傳說をよみしもの多し。一詠「勝鹿眞間娘子歌一首」（卷九）。「過勝鹿眞間娘子墓時」（卷三）等。

ゝも、其夜はそこに念佛して明しける。

寢られぬまゝに翁かたりていふ。「翁が祖父のその祖父すらも生れぬはるかの往古の事よ。此里に眞間の手兒女といふいと美しき娘子ありけり。家貧しければ身には麻衣に青衿つけて、髮だも梳らず。履だも穿かずてあれど、面は野の夜の月のごと、笑めば花の艶ふがごと、綾錦につゝめる京女萬にも勝りたりとて、この里人はもとより、京の防人等、國の隣の人までも、言をよせて戀慕はざるはなかりしを、手兒女物うき事に思ひ沈みつゝ、おほくの人の心に報いずとて、此浦曲の波に身を投げしことを、世の哀なる例とて、いにしへの人は歌にもよみたまひてかたり傳へしを、翁が稚かりしとき母のおもしろく語り給ふをさへ、いと哀なることにきゝしを、此亡人の心は昔の手兒奈がをさなき心に幾らをかまさりて悲しかりけん」と、かたる〳〵涙さしぐみてとゞめかぬるぞ、老は物えこらへぬなりける。勝四郎が悲みはいふべくもなし。此物がたりを聞きて、おもふあまりを田舍人の口鈍くもよみける、

いにしへの眞間の手兒奈を斯ばかり戀てしあらん眞間のてこなを

延長　醍醐帝の御字

興義　江州三井寺の住僧なり。頗る畫名あり。其門生成光と雖も閑院の障子に畫くに、其のこゝろ生動來りてこれを觀ける人（本朝繪史）

思ふ心のはしばかりをもえいはぬぞ、よくいふ人の心にもまさりて、哀なりとやいはん。かの國にしばしばかよふ商人の聞傳へてかたりけるなりき。（雨月物語）

二　夢應の鯉魚

むかし延長の頃、三井寺に興義といふ僧ありけり。繪に巧なるをもて名を世にゆるされけり。常に畫く所、佛像山水花鳥を事とせず。寺務の間ある日は湖に小船をうかべて、網引釣する泉郎に錢をあたへ、獲たる魚をもとの江に放ちて、其魚の遊ぶを見ては畫きけるほどに、年を經て細妙にいたりけり。あるときは繪に心を凝らして眠をさそへば、ゆめの裏に江に入て大小の魚とともに遊ぶ。覺むればやがて見つるまゝを畫きて壁に貼し、みづから呼びて夢應の鯉魚と名づけけり。その繪の妙なるを感でて乞ひ求むるもの前後をあらそへば、只花鳥山水は乞ふにまかせてあたへ、鯉魚の繪はあながちに惜みて、人毎に戲れていふ。生を殺し鮮を喰ふ凡俗の人に、法師の養ふ魚必ずしも與へずとなん。其繪と俳諧とともに天下にきこえけり。

一とせ病にかゝりて、七日を經て忽に眼を閉ぢ息絶えてむなしくなりぬ。徒弟友どちあつまりて歎き惜みけるが、只胸のあたりの微し暖なるにぞ、もしやと居めぐりて守りつも、三日を經にけるに、手足すこし動き出るやうなりしが、忽ち長嘘をつきて、眼をひらき、醒めたるが如くに起きあがりて、人々にむかひ、「我人事をわすれて既に久しき日をか過しけん。」衆弟等いふ。「師三日前に息たえ給ひぬ、寺中の人々をはじめ、日頃睦まじくかたり給ふ殿原も詣たまひて、葬の事をもはかりたまひぬれど、只師の胸の暖なるを見て、柩にも藏めで、かく守り侍りしに、今や蘇生りたまふにつきて、かしこくも物せざりしよと怙びあへり。」興義うなづいていふ、「誰にもあれ一人、檀家の平の助の殿の館に詣りて告さんは、法師こそ不思議に生き侍れ。君今酒を酌み、鮮き鱠をつくらしめたまふ。しばらく宴を罷めて寺に詣でさせたまへ。稀有の物語聞えまゐらせんとて、彼の人々のある形を見よ。我詞に露たがはし」といふ。使異しみながら彼館に往きて其由をいひ入れてうかがひ見るに、主の助をはじめ、令弟の十郎、家の子掃守など居めぐりて酒を酌みゐたる。師が詞のたがはぬを奇とす。彼館の人々此のことを聞きて大に異しみ、先箸を止めて、十郎掃守をも召し具して寺に到る。

興義枕をあげて路次の勞をかたじけなうすれば、助も蘇生の賀を述ぶ。興義先づ問うていふ。「君試に我いふ事を聞かせたまへ。かの漁父文四に魚をあつらへたまふことありや。」助驚きて、「まことさることあり、いかにしてしらせたまふや。」興義、「かの漁父三尺あまりの魚を籠に入れて君が門に入る。君は賢弟と南面の所に碁を圍みておはす。掃守傍に侍りて、桃の實の大なるを咽ひつゝ奕の手段を見る。漁父が大魚を携へ來るを喜びて、高杯に盛りたる桃をあたへ、又盃をたまうて三献飲ましめたまふ。鱠手したり顔に魚をとり出て鱠にせしまで、法師がいふ所たがはでぞあるらめ」といふに、助の人々此事を聞きて、或は異しみ或はこゝち惑ひて、かく詳なる言のよしを頻に尋ぬるに、興義かたりていふ。

我此頃病にくるしみて堪へがたきあまり、其死したるをもしらず、熱きこゝちすこしさまさんものをと、杖に扶られて門を出づれば、病もやゝ忘れたるやうにて、籠の鳥の雲井にかへるこゝちす。山となく里となく行き行きて、又江の畔に出づ、湖水の碧なるを見るより、現なき心に浴びて遊びなんとて、そこに衣を脱

ぎ去てて、身を跳らして深きに飛入りつも、彼此に游ぎめぐるに、幼きより水に狎れたるにもあらぬが、慾ふにまかせて戯れけり。今思へば愚なる夢ごゝろなりし。されども人の水に浮ぶは魚のこゝろよきにはしかず。こゝにて又魚の遊びを羨やむこゝろおこりぬ。傍にひとつの大魚ありていふ。師のねがふ事いとやすし。待たせたまへとて、杳の底に去ると見しに、しばしゝて、冠装束したる人の前の大魚に跨がりて、許多の鼈魚を率ゐて浮びきたり、我にむかひていふ。海若の詔あり。老僧かねて放生の功徳多し。今江に入て魚の遊躍をねがふ。かりに金鯉が服を授けて水府のたのしみをせさせ給ふ。只餌の香ばしきに昧まされて、釣の糸にかゝり身を亡ふことなかれといひて、去りて見えずなりぬ。不思議のあまりにおのが身をかへり見れば、いつのまに鱗金光を備へて、ひとつの鯉魚と化しぬ。

あやしとも思はで尾を振り鰭を動かして心のまゝに逍遙す。まづ長等の山おろし、立ゐる浪に身をのせて志賀の大灣の汀に遊べば、かち人の裳のすそぬらすゆきかひに驚されて、比良の高山影うつる深き水底に潜くとすれど、かくれ堅田の漁火によるぞうつゝなき。ぬば玉の夜中の潟にやどる月は、鏡の山の峯に清みて、

長等山　三井寺の西方
志賀の大灣　琵琶湖に望ゆ
鏡の山　近江の歌名所

八十の湊の八十隈もなくておもしろ。沖津島山、竹生島、波にうつらふ朱の垣こそおどろかるれ。さしも伊吹の山風に、旦妻船も漕出れば、蘆間の夢をさまされ、矢橋の渡りする人の水なれ棹をのがれては瀬田の橋守にいくそたびか追はれぬ。日あたゝかなれば浮び、風あらきときは千尋の底に遊ぶ。

急にも飢ゑて食ほしげなるに、彼此に糞り得ずして狂ひゆくほどに、忽ち文四が釣を垂るるにあふ。その餌はなはだ香し。心又河伯の戒を守りて思ふ。我は佛の御弟子なり。しばし食を求め得ずとも、なぞもあさましく魚の餌を飲むべきとてそこを去る。しばしありて飢ますます甚しければ、かさねて思ふに、今は堪へがたし。たとひ此餌を飲むとも嗚呼に捕れんやは。もとより他は相識ものなれば、何のはゞかりかあらんとて、遂に餌をのむ。文四はやく糸を收めて我を捕ふ。こはいかにするぞと叫びぬれども、他かつて聞かず顔にもてなして、繩をもて我腮を貫ぬき、蘆間に船をつなぎ、我を籠に押し入れて君が門に進み入る。君は賢弟と南面の間に奕して遊ばせたまふ。掃守傍に侍りて菓を昭ふ。文四がもて來し大魚を見て、人々大に感でさせたまふ。我其とき人々にむかひ聲をはり上げて、旁等

竹生島　琵琶湖中の一島弁天祠あり
旦妻船　近江坂田郡朝妻と云ふ所の船

は興義をわすれたまふか。宥させたまへ。寺にかへさせたまへと連に叫びぬれど、人々しらぬ形にもてなして、只手を拍つて喜びたまふ。鱠手なるものまづ我兩眼を左手の指にてつよくとらへ、右手に礪すませし刀をとりて俎盤にのぼし、既に切るべかりしとき、我くるしさのあまりに大聲をあけて、佛弟子を害する例やある。我を助けよ助けよと哭き叫びぬれど、聞き入れず。終に切らるゝとおぼえて夢醒たり」とかたる。人々大に感で異しみ、師が物がたりにつきて思ふに、此度ごとに魚の口の動くを見れど、更に聲を出すことなし。かゝることまのあたりに見しこそいと不思議なれとて、從者を家に走しめて殘れる鱠を湖に捨てさせけり。（雨月物語）

伊豫守源の朝臣　鵜經　鎌倉の大將殿　頼朝

三劍の舞

伊豫守源の朝臣、鎌倉の大將殿の御心にたがはせ給ひしかば、都をいでゝ吉野の山深く隱れさせ給ひしかど、そこにもはたえおはせで、いづち知らず逃れゆき給ひけり。靜かひがひしくこゝまで從ひ奉りしが、なか〳〵の御情に都に歸るべく仰せ給はりぬるを、打泣きてとゞまりしを、山の法師等捕へてうての使に奉る。御行くへ更に知らずと申すを、猶疑はしさにあづまに召し下し給へりき。

山の法師　吉野山の山僧

もとよりをゝしき操のまゝに、「知り侍らぬ事を問はせ給はんより命めされよかし。天の下は御心のまゝならずや。いづちに逃れ隱給ふとも、遂には獲られ給はん。いみじきこと見奉らぬ程に。」とて、その後は露ばかりも言を交へず。いかにし給ふべくもあらで、たゞ守らせて籠めおき給ひぬ。

御代は治まりしかど、猶怠るまじき此頃に、いたく屈し給ひてやおはしけん、靜は天の下の舞の上手となん聞く、一さし舞ひて見すべく仰せ給ふ。いとつらくうるさく今は立ち舞ふべくもあらぬ身の程を打泣きて辭み奉る。北の方より御使あり。「うちうちの仰言をさこそ情なくもおぼし疎むらめ、いとほしきことなれど、この御心をとり月日過さんほどには、御はらから再び枝をつらねさせ給はん世をも見ん、その御爲にこそかくすゞろぎて聞え奉るなれ。されど御土器のはえばかりには情なし、氏の大神に詣でゝ延尉の君の御身つゝみなかれのねぎことして、神をいさめ給へかし。おほけなく天の下のため、御はらからの御中睦じからんた

立ち舞まふべくも　「物思ふに立ちまふべくもあらぬ身の袖打振りし心知りきや」（源氏、紅葉賀）

北の方　平政子

氏の大神　源氏の大神卽ち鶴ヶ岡八幡宮を指す

延尉の君　義經のこと、檢非遣使の判官の唐名

めに、心ゆかずともまげていで立たせ給へ。」といひ聞ゆ。

さすがに心弱くて涙おさへつゝ、「いかさまにも仰せのまゝに畏まりぬ。」と申す。大將殿、北の方に「よくもすかいこしらへつ、神も樂しとや御覽ぜん。」とて日を擇びていそがせ給ふ。その日になりぬ。あしたより空清う晴れて御垣の內外の松杉のむらだち枝を鳴らさず、鳥の囀りほがらほがらとのどかなり。大將殿、北の御方、若君達の御輿かきつらね出させ給へけり。捕はれ人のは預りの武士の中に取り圍みて御あとにつきて參る。みてぐらあまた大神のふと前に高くつみならべ、巫がのりとごと大宮の內に轟き聞ゆ。事はてゝ直會殿（なほらひ）に入らせ給ふ。北の方、若君は御簾たれこめておはす。老いたる武士たち大將殿の左右に居並みて、袖打垂れてひかへたり。靜いとものうく心にもあらで、御前に進みいでたり。烏帽子の緒結びたれ、色濃き衣うち重ねたる上に、山藍摺りもどろかし袖長きに、赤き袴のこはごはしきを踏みはらかし立ちたるさま、あてにこめいて、白くにほひやかなる面わの少し衰へしやとおぼしきは、まみの重げなるやうにぞ打見えたる。

眞會殿　神社に附屬する殿舍、なほらひをするところ

はららかし　獻散らし

繪にやうつさましと人々さゞめきあへり。物のね高く調べ合する程に扇をやをら取りかざし、袖すこしうち翻し、聲はいと細う匂ありて、まづあはれとぞ聞き給へる。その歌

み吉野の御金の嶽に時なくぞ雪は降りける。間なくぞ雨は降りける。その雪の時なきがごと、その雨の間なきがごと、隈も落ちず偲びつゝぞ來し。その山道を（萬葉集第一卷天武天皇御製）

み草苅る、鎌倉山のや、神の瑞垣の松には、鶴ぞ巢をくふ、千とせのどちに。

足曳の、山の櫻はや、色香あくまでも見ん、風ふかぬ世に。

一さし舞ひ終りてふし拜みつ。君をはじめて、人々あかずめでたしと見給へり。

また立ちあがりて

み吉野の、吉野の山はや、時なくぞ雪は降るといふ、時なくぞ雨は降るといふ、その雨の時なきがごと、わが涙の雨はふりける、吉野山雪ふみわけて、いづち知らず、いきし君はも。

海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍、海ゆかばみづく屍ぞ、大君の國のみために、死なんと立げ苔生す屍、大君の邊にこそ死なめ云々（萬葉集一八、

いと悲しげに歌ふを、聞く人皆身にしみて鼻からく覺ゆ。また立ちあがりて、色よき袖をまくり手にして、扇は劍と打振りつゝ

山ゆかば草むす屍、海ゆかばみづく屍ぞ、大君の國のみために、死なんと立てしみ心の、猛く直きをたれ言ひさきて、世にはふらしけん、狡兎は死して狗は烹られ、高鳥盡きて弓はふくろに、うたての古言や、いたはしの我君や。

隨奥の國から金が出たについて出された詔書を拜して賀し奉つた歌一節、大伴家持）

狡兎は死して狡兎死て良狗烹、高鳥盡て良弓藏、敵國破て謀臣亡。（史記韓信傳）

御たたう　檀紙

みこしが崎　稻村崎の古名

かまくらの美　胡之能佐きのいはくえのきみがくゆべきこゝろはもたじ（萬葉集）

かく歌ひつゝ、舞踏あらゝかに、扇をはたはたと打ちはらゝかしつるは、誰をか打つと、見る人あやしがる。これまでなりとて幕をかゝげて入りぬ。

大將殿おぼす、はての劍の舞はわれを憎しとて打ちしならめ。さは物かづけたりとも、嬉しとは思はじとて、御硯召して御たたうの物の香しめる紙に御筆走らせ、取り傳へさせ給へり。

をみなへし主なき宿の庭草はくねりてひとり立つが悲しき

見奉りて涙いよゝ止め難くぞある。その紙のはしつかたに、墨つき見分つまじくはかなげに書きて、そこに捨ておきたるを又とり傳へて御前に奉るを、取りて見給へば、

鎌倉のみこしが崎によする浪岩だにくやす心碎けて

あはれのことや、よくいたはれ。直き操を枉ぐるわざして、強ひて物問ふな。」とて情しくこめおき給へりとなん語り傳へたる。（つゞら冊子）

この一篇は天明八年京都大火災の記事なり

吳春　松村氏月溪、四條派の祖

經亮　櫻氏、梅宮の嗣官

梅津　山城葛野郡、西梅津に梅宮あり、梅津の村路は京都四條の末に當る

東洞院　左京の東より二つ目の縱の大路

かはほり　鴛

京兆の尹　町奉行

神泉苑　二條城南、天子遊賀の御園

大城　二條城

因幡堂　五條烏丸東、

四　迦具都遲のあらび

むつ月二十八日都に遊ぶとて、まづ伏見山をわけ行く。梅は此頃さかりなりけり。廿九日の夜、吳春の許に宿る。梅津なる經亮もこゝに問ひ來ませり。夜ふくるまで物語してぬる程もなきに、あかとき方燒亡の聲して人立ちさうどけり。鴨河の東四條の南と聞ゆ。夜べより巽の風烈しう炎さかんに川を飛び越えて、こなたざまに燃えくる。この宿りし東の洞院の家も朝のあひだに空しくなりぬ。風は只吹きに火は只燃えに、西に押し立ち行くさまは、かはほり打廣げたらん如くなり。午の時過ぐる比、上は京兆の尹の御館、神泉苑に火かゝり、大城もほと〳〵火つきぬべしといふ。下つ方は因幡堂、本國寺などもとく燒けて朱雀野までと聞ゆ。めう〳〵と立ち昇る炎は雲を焦して、月日の光も見えず、物の頽るゝ音は千々の雷を響かせ、人の泣き叫ぶ聲、走り惑へる有樣、譬へんに物なく悲し。わが宿るべきをちこちの家どもも今は殘りなくなりぬ。いと淺ましきに夢現ともわき難くてなん。聖護院なる人の庵にて、やうやう故里に歸らんの心定めて、申の傾く比、

眞言宗本國寺　五條南、日蓮宗一致派の本山

朱雀野　舊朱雀門朱雀大路の村郊を曰ふ

聖護院　神樂岡崎の西南、岡崎の西北にあたる

東福寺　泉涌寺の西南にあり、臨濟宗

孝道　傳未詳

伏見　山城紀伊郡、宇治川に沿ふ

都を出でて、道々人のさま哀れなる事のみをぞ見る。いときなき者を前うしろにして老いたる人の手を引きたれば、はやりたる心のままにもえ歩まず、或は病の牀ながらかきもて行く。又産屋の人をわりなく歩ませていたはるもあり、子を迷はせて求めかぬる。老いを倒さじとすまふ、あるは氣ののぼりてまなこを怒らし、神佛を怨み罵りゆく人あり。常にはいかにもあてならんと覺ゆるが、けはひ剝げ眉打ひそめ物さへかづかで、立ち走りまどへる、衾を負ひ調度を荷ひたるは勇しなども見ゆれ、そのかき出でたる物積みはへて、女わらべもりするたるは用意ありげにこそあれ、暮れなばいかに佗しからんと思ゆ。東福寺の前にておとつ日手を別ちたる孝直にいき合ひたり。いかにや〳〵とかたみになつかしうて物も言はれず。難波にしか〴〵の事どもあつらへ聞え、猶去り難き人々見つくとて、都の方へゆくうしろで見送るにも、今宵いづこにか宿らんと聞えし事の胸つぶるゝなりけり。

伏見の岸の闇に舟求むれどあらず、心ならねど宿りぬ。雨降りいでゝ風猶やまず、神さへ鳴る。孝直いづちにか這ひ隱るらん、物の陰なく宿りし人々いかに歎き惑ふらん。辛うして持て運びし物も濡れにぬれて、いづこも〳〵さる樣にのみ泣き悲むともすべなき夜かなと、すゞろに涙とゞめかねて、そなたの空を見やれば、ほの氣雨雲に燃え渡りて、あかあかと物の隈なく見ゆるは恐しな。夜すがらの風のたよりを聞けば、はやち乾に吹き返されて、今は大宮所も火つきぬと申す。あな淺ましと聞きつれど、かうやうの時はまが言いふ者のあなるをと、さる方に思ひ賴みて明しぬ。あした大路の語り言を聞けば、まさしく燒けさせ給ひて、至尊は加茂の社へ遷幸なしませしとも、又比叡、鞍馬いづれにか避けさせ給へりとも、猶くはしき事は聞えずなん。いと淺ましく悲しき事の限りなりけり。

やゝ朝開きするに打乘りて、流れくだりて枚方のうまや漕ぎ過ぐる程より、舟も陸も立きつゞきて、都のたより覺束なしとにや人急ぐめり。見返ればめう〳〵とそびき立ちたる烟の、今は九重の内外殘りなくぞなりぬべし。孝直いかにや、友垣らいづちにかのがるらん、彼此思ひつゞけらる、さてなん消息おほかたに聞えて、内侍所、至尊御事もなく聖護院の室へ入らせ給ひ、上皇は粟田へと申す。その夜のおほん有樣人とりどりに言ふめれど、猶訝しくかつ浮きたる事を後に傳

はやち　疾風

大宮所　御所

加茂の社　上鴨と下鴨とあり共に愛宕郡にあり

比叡　近江山城の境にあり

鞍馬　愛宕郡にあり

枚方　河内國北河内郡、淀川の水驛

聖護院の室　神樂岡の西南岡崎の西北に當る。天台宗三井寺門派門主の居なり

栗田洛東

二條二の丸殿　二條城の二の丸

花山殿の館　北野の社　上京、官幣中社菅原道眞を祀る

東寺　眞言宗の總本山、敎王護國寺と曰ふ

西本願寺　眞宗本會の本山

興正寺　本願寺の南にあり、眞宗中一派の本山

枳殼の室　東本願寺の別園

いろは　母の事

へんはとて書きもとゞめず。

抑も皇居の火ありしこと、今の都にてあまた度なるが中にも、村上天皇の天德四年、後朱雀の長久元年、後深草の建長元年、後土御門の應仁元年、後西院の萬治元年、靈元院の延寶元年、さては此度なるぞいみじき世の災なりける。かくてぞいにしへの神寶や書や何やのものも、その度々に燒け亡びしには、今やあがりたる世の事どもの、まさしく傳はるべからぬことわりをも、おろ〳〵心得らるゝなりけり。さて此度まぬがれし所々僅なりき。おほん書庫、二條の二の丸殿、花山殿の館、北野の社、東寺、西の本願寺、興正寺、六條の枳殼の室、その外は都の外なる所々なん、元のたゞずまひなりける。人も多く失はれしといへど、正しき事は知られざりけり。物のあはれ知る知らぬも、なべて歎きあへる世の災になん。その有樣今思ひ出づるさへに、いとも恐しな。

火の氣にはいろはの神も燒かれにしその迦具都遲の荒らぶ今日はや

（秋成遺文）

この一篇は寛政十年の夏「目おもくやみていたはりすと河内の日下の里正法寺と申す寺に一美女の唯心尼を伴ひてゆきけるに折の記事なり」

周防の岩國　吉川氏六萬石の城下

五　狐の祟

この夜ふけて、野狐のからびゝ聲して、しば〳〵鳴く。べうさの尼いたう恐しがりて、うつぶし〳〵いも寢ず。あした、人々のいへる、「かれかなし子や失ひつらん、時々忌はしき聲して、枕おどろかすよ。」とて、これにつきて、いとあやしき物語を、ひとりびとりつぶ〳〵と語る。目ざまし草なん多かる。寺主の語り給はく、「我まだ若かりし時には、世をおなじうし奉れば、御まのあたりせし人も、敎うけたまはりし人も、今はた世にあまたおはすらんかし、周防の岩國どのゝ御垣の內に、とう仙寺と申すは、菩提院にて、世の塵にまじはらぬ御寺なりけり。石霜大和尙と申しゝを迎へて、仰ぎかしづき給へりき。いみじき大とこにて御齡七十にあまり給へり。殿のみおやの御いみ日に當らせて、花つみ香たきくゆらせ、御讀經の行ひなん翌と申す日、御ときの料に豆。麩あまた油に煮こゞらせ調じ置きつるを、人まに狐や盜みくひけん、殘りなく失せつ。若法師等慌て惑ひ、「いかにせん、此物あらでは。」とて走りまどひ、又同じ數求め出で調ずる程に、「いとに

くし、かれ又窺ひ來らん、さらぬ物にし構へ、ゆくりなく捕へばや。」と云ふ。大かたは雲水にありか定めぬ心から、勇みがちにて、こゝよりとおぼしき壁の崩れを、遠く守らへをる。

おろかものゝかくてありとも知らで、また這ひ入る。すはやとて、こゝかしこより走り出で、心合せたれば、たゞに捕へんとす。翅こそなけれ、ぬけくゞり飛び走り、誰も〳〵えおひうたず。されどいと責めに責めつけられて、物の穴より出でんとす。追ひつめて尾を引き足を強く捕へたれば、頭を引きちぎりて、からは法師達の手にとゞまり、人々こゝろよげに立ち別れぬ。

そのやがてに十二三ばかりの小法師の、いつのまにか松かいともして、三寶の軒にさしつくとする程に忽ちめう〳〵と燃えあがり、只今たゞ燒け亡びなんとす。御寺の人々、いかにや〳〵と慌てさうどけるに、くるわの内なれば、殿の人々のかぎり物の具とり、水はじきかけ、軒をくづし瓦をうちなどして、やう〳〵に打消ちたり。小法師いそぎ捕へられて、「何心してかく恐しきわざはする。」と責め問へば、「老和尚のしか物せよと仰せ給ふまゝにかくはせしぞ。」と云ふ。いとあやしけれど、召し出でゝ問はするに、一言だも答へ給はず、わがあやまちぞとおぼし定めたるつらつきなり。かうの殿もたふとくかしづかせ給ふに、「此日比物ぐるほしうもおはさざりしに、いはれこそあらめ、猶問へ。」と仰せ承るものゝふ達、かはる〴〵言をつくして求むれど、たゞ木にて作りたる如くにもだしてのみおはす。罪せんや、許してんや、御惑ひしておはするほどに、たが告げりけん、長門どのゝ聞召して、「かゝるくせ者を、くるわの内に住ませしは、いとも淺はかなり。いそぎ、しをり殺しても言はせよ。」と御使しきりなり。今はすべなくてさま〴〵さいなみ問ふ。角ある物の上に居らせて、磐石を膝の上に三つまでおかせたり。七十に餘る老の何かは堪へん、目口鼻より血流れ出て、つひにめくら者となり給ひき。いと悲しとこそ見れ。かくてだに一言をもまじへ給はず、息も今はたえ〴〵なり。このうへにはとて、大庭を掘りて、炭、たき木燒きほこらせ、それが上に黑金の橋をかけて、これ渡らせんとし構へたり。語るだに聞くだに魂も身にそはず、恐しく淺ましき事のかぎりなりけり。

さてこゝに引き立て來て、しかじか行ふべくいひ聞かすに、たゞ答へ給はず。

かうの殿　守の殿。岩國主を指す

長門どの　本藩たる毛利を指す

雪洞の法のともし火
四大洲
東勝身洲
南贍部洲
西牛貨洲
北倶盧洲
鬼道

ほの氣はめう〳〵と立ちのぼりて、あたりだに近づくべからぬを、一足も堪へんやは。こゝにおりあへる人々も、かうまではいかでと、息をつめ黑き汗を流して悲しがる。かうの殿はしの間に出で給ひて、「いかに苦しくやおはさん、賴みて迎へ奉りしに引きかへ、かうためしなきわざしてさいなむ事、心の外なりと　おぼしも知らるべし。たゞ毛利の大とのゝ强ひて言はせよと、御使日々なり。此度答へ聞えずは御身はもとよりにて、長門、周防の國の中には、雪洞の法のともし火もふつに消ちはて、よく問ひはてずは我家の風をも吹かせじとうち〳〵思し定め給ふとも承りぬ。大とこの命ひとつ惜まぬことさもあらばあれ、多くの罪を道にも國にも及ぼして何にかは、佛の敎にはかく心こはきためしやある、いで聞き侍るべし。」とすゞろぎて聲あらゝかなり。

こゝに大とこはじめて口を開き、「重き病して苦みうくると思ひ侍れば、此日ごろ堪へ忍ぶべきに侍り。命めされんことは、老の末の齡惜しとも思ひ侍らず。又兩國のあひだに法の光なからん事も驚くべをらず。かく四大洲にみち〳〵て、照さぬ隈もあらねば、しばしの御いかり休むるほどにてこそあれ。たゞ此御國の禍と承りぬるこそ、いといたう悲しく侍れ。こゝにおろかなる願の侍るを許させ給はんには。」と云ふ。かうの殿、「何事にまれ、かゝるきざみに承はらでやあらん、とく。」と聞え給ふ。「さらば御齡のかぎり物の命を絶たせ給はらずば。」と云ふ。「さるやすき程のことやはある、など辛きめ見ぬうちには言はざりつる。」「いとかたじけなし、今は世に思ふことを侍らず。」とて四句の偈高らかにずんじ終り、「物見せ奉らん。」とて、前なるめう火に臨みて、口を大きに開き、をゝと叫ばせ給へば、あやし、からのみとゞめたる狐の、かしらをめう火の中に吐き入れ給ひぬ。かうの殿をはじめ御まへにある限の人々、目を見はたかり口あくまであきて、「いと怪し、あなたふとし。」など口々にさゝめきあへりけり。

事のすぢ今はあらはにて、大とこ罪をまぬがれ給ひ、若き法師達のし出でしあやまちも咎め給はず、狩などおぼしたゝせずて、かれらも命またく事はてぬ。大とこ今はこゝを去りて外に移り給へりき。毛利の大とのも、かれに近よられし事を恥ぢ給ひぬとなん聞ゆる。かのむくいするもの等、おのがあしきを思はで、人をたばかり苦しきめ見せて、心ゆくとするや。之れぞおろかなる限なりける。い

とあやしき山がつ等も、かゝるきたなき心はもたらぬなん、人ばかり嬉しきものはあらざる。彼の四句の偈は、空には思ひ出でずとなん語り給ひし。いと目ざましうたふとき御物語なりけり。（山霧記）

夢然作中の人物

詩偈佛頌

寒林の詩空海の著「性靈集」に見ゆ

六落葉籠

一　高野の奥

御廟のうしろの林にと覺えて佛法々々となく鳥の音、山彦にこたへて近く聞ゆ。夢然目さむる心地して、あな珍らし。あの啼鳥こそ佛法僧といふならめ、かねて此山にみ栖つるとは聞きしかどまさに其音を聞きしと云ふ人もなきに今宵の宿り、まことに滅罪生善の祥なるや。かの鳥は清淨の地をえらみて棲めるよしなり。上野の國迦葉山、下野の國二荒山、山城の醍醐の峯、河内の科長山、就中此山にすむ事、大師の詩偈ありて世の人よく知れり

寒林獨座草堂曉　三寶之聲聞一聲
一鳥有聲人有心　性心雲水俱了々

松の尾の歌藤原光俊の詠

延朗天禄僧、源義家四世の孫、承元二年寂

松尾山城にあり、最福寺は山南にあり

親子夢然とその子

又ふるき歌に

松の尾の峯しづかなる曙にあふぎて聞けば佛法僧啼く

昔、最福寺の延朗法師は世にならびなき法華者なりしほどに、松尾の御神、此鳥をして常に延朗に仕へしめ給ふよしを云ひ傳ふれば、かの神垣にも巣むよしは聞えぬ。今宵の奇妙既に一鳥聲あり、我こゝにありて心なからんやとて、つねの樂とする俳諧風の十七言をしばしうち傾きて云ひ出でける。

鳥の音も祕密の山の茂みかな

旅硯とり出でて御燈の光に書いつけ、今一聲もがなと耳をかたむくるに思ひがけずも遠く寺院の方より前を追ふ聲のいかめしく聞えてやゝ近づき來り、何人の夜深けて詣で給ふやと異しくも恐ろしくも親子顔を見合せて息をつめ、そなたを見守りゐるに、はや前驅の若侍橋板あらゝかに踏みてこゝに來る。（雨月物語――佛法僧）

二　荒寺

山院人とゞまらねば樓門は荆棘生ひかゝりて經閣も空しく苔蒸しぬ。蜘蛛網を結びて諸佛をつなぎ、燕の糞護摩の牀をうづみ、方丈廊房すべて物すざましく荒れはてぬ。日の影申にかたふく頃、快庵禪師寺に入り給ひて錫を鳴らし給ひ「遍參の僧今夜ばかりの宿をかし給へ」とあまたたび呼べどもさらに應へなし。眠藏より痩せ槁れたる僧のよわ〳〵と歩み出で、咳びたる聲して「御僧はいづちへ通るとて此處に來るや。此寺はさる由緣ありてかく荒れて人も住ぬ野らとなりしかば、一粒の齋糧もなく一宿をかすべきはかりごともなし、早く里に出でよ」と云ふ。禪師云ふ。「これは美濃國を出でてみちのくへいぬる旅なるがこの麓の里を過ぐるに山の容、水の流れのおもしろさに、思はずもこゝに詣づ。日も斜めなれば里に下らんもはるけし。ひたすら一宿をかし給へ。」あるじの僧云ふ。「かく野らなるところは好からぬこともあなり。強ことゞめがたし。強て行けとにもあらず。僧の心に任せよ」とて復び物をも云はず。こなたよりも一言を問はであるじの傍に座をしむ

申
四南
快庵
名妙慶、明暦二年寂
眠藏
禪家にて寢室を云ふ

る。みる〳〵日は入り果てゝ宵闇の夜のいとくらきに、燈を點げざれば、まのあたりさへわからぬに、たゞ谷水の音ぞ近く聞ゆ。（雨月物語――青頭巾）

三　森の怪

關所數多の過書文とりて、所々の咎なく近江の國に入りて、明日は都にと思ふ心すゝみにや、宿取り惑ひて、老曾の杜の木隱、今夜はこゝにと、松が根枕もとめに、深く入りて見れば、風に折れたりともなく、大樹の朽倒れしあり。踏越えて、さすが安からぬ思して立煩ふ。落葉小枝道を埋み、淺沼渡るに似て、衣のすそぬれ〳〵と悲し。神の祠立たせます。軒こぼれ、御階崩れて、昇るべくもあらず、草高く苔むしたり。誰がよんべ宿りし跡なる、すこしかき拂ひたる處あり。枕はこゝにと定む。負ひし物下して、心落ちゐたれば、恐しさは勝りぬ。高き木群の茂く生ひたる隙より、きら〳〵しく星の光こそ見ゆれ、月は宵の間にて露冷かなり。されど明日の天氣賴もしと獨言して、物うち敷き、眠に就かむとす。怪し、こゝに來も人あり。脊高く手に矛取りつ、道分したる猿田彦の神代さへ思ほゆ。

過書文
關所を過ぐる手形

よんべ
昨夜

猿田彦
環々竹尊が天降り給ひし時案内したる鼻高い神

後につきて、修驗の柿染の衣肩に結上げて、金剛杖つき鳴らしたり。その後につきて、女房の白き小袖に赤き袴の裾糊しはげに、はら〳〵と踏みはらゝかして歩む。檜のつまでの扇かざして、いとなつかしげなる面を見れば、白き狐なり。その後に童女のふつゝかに見ゆる、これも狐なり。社の前にたち並びて、矛とりて神人中臣の、おらび聲高らかに、夜まだ深からねど物の答ふるやうにてすさまじ。神殿の戸荒らかに明放ちて、出づるを見れば、頭髪面におひ亂れて、目一つかゞやき、口は耳の根まで切れたるに鼻はありや無し、白き打著の鈍色に染みたるに藤色の無紋の袴、これは今調じたるに似たり。羽扇を右手に持ちて、歩みたるが恐ろし。

神云ふ。この國はむやくの湖水に狹められて山の物、海の物も共に乏し。賜物急ぎ酒酌まんと仰す。童女立ちて御湯奉りし竈のこぼれたるに木葉小枝松毬かき集めて薫らす。めら〳〵と焔の立昇る明りに、物の隈なく見渡さるゝ恐ろしさに笠うち被き寢たるさましていかになるべき命ぞと心も空にてあるに酒とく暖めよと仰す。狙と兎が大いなる酒瓶さし荷ひて歩苦しげなり。疾くと申せば肩弱くて

正木づら　漢草

春雨物語秋成晩年の創作、短篇五種を敎し、現存するは前半のみ

（大正九、高校）

（大正十二、水産講習所）原文を改めたるところあり

なほ人一只人

と畏りぬ。童女事ども執行ふ。大なる土器七重ねて御前に重たげに擎ぐ。白き狐の女房酌まゐる。童女、正木づらの襷かけて火たき物暖むる樣まめやかなり。

さてあの松が根枕して空寢入したる若男、呼びて饗せよと言へとぞ。召すと女房の呼ぶに活きたる心地はなくて這ひ出でたり。（春雨物語――目一つの神）

四　梶枕

梶枕わびしくおぼさば、かしこによせむ。かの野にやどりたまへと申す。風波はげしからねば、たゞこのまゝにとて苫の下臥しして明かしにけり。（秋成遺文）

五　圓位

文治それの年の秋八月十五日鎌倉の大將殿、鶴ケ岡の宮居に詣でさせ給ふ。廣前を罷りて御手輿に召させ給ふほど御階の忌垣のもとにかしこまり居る法師の見上げ奉る面つき、旅に飢えていとやせ黑みづきたるに、衣杖笠なども乞食者のさましたるを、鋭き御眠尻にとゞめさせ給ひなほ人ならずとや覺しけん「あの法師

が修行するやう、名を問へ」と仰せ給ふ。御輿添の若侍急ぎ走り寄りて「ありがたく御目賜へり、何處よりの修行ぞ、名をも申せ」といふ。ゆくりなきに驚きたる樣して「雲水に在處定めず侍るものにて名は圓位と申す」といふ。聞しめされて「さればこそ聞き知りたれ。穴熊の猛き獲物の類ならで、賢き人得たるためしに、誘ひ歸らん。わが後へにつき參れとい へ」とて召し連れさせ給へり。（つゝらぶみ——月の前）

圓位　西行の事

六　右府

（大正、米澤高工）

右府　細朝　漢高　漢の高武皇帝　曹孟德　魏の武帝

西行後に此事を人に語りていふ、「右府は誠にねぢけたる君なり。口に蜜し給へど、心には針のおはすぞ。漢高の大度、曹孟德の智略あるに似て、天下の人みな此君の網の中に入れられたるは、我佛の冥福といふ事を生れ得させけん。たゞ悲しむべきは神の御裔の、此後やうやく衰へさせ給はん世の姿なるは」とて涙とゞめがたくして物がたりしとなり。（月の前）

七　まろうど

（大正十一、廣島高師）

「つゝらふみ」の中にある文

みよしのゝ吉野の奥に旅寢して世に似ぬ秋の月を見るかな

光は宵のまにて、入りかたとおぼしきより雨頻りなり。今宵も憂くわび泣きして明しぬ。七日の行ひ、あしたより雲の名殘なくて、人々歡ぶ。まろうど來れり。奥山住の里人と云ふ。老いたる人の、頭に黑き頭巾を冠ぶりて、あやし、額に角あるかたちを作りなし、身には駕輿丁の著るべき麻布衣をふし染にして、僧俗のけぢめ知られぬいでたちしたり。（御嶽さうじ）

上田秋成文抄　終

大正十三年四月　五日印刷
大正十三年四月　十日發行

定價金貳拾錢

編者　鈴木敏也

東京市牛込區馬場下町二十九番地
發行者　宮部富三郎

東京市小石川區指ヶ谷町四番地
印刷者　宮下桃太郎

發行所　東京市牛込區馬場下町二九
振替口座東京五三二二九番　斯文書院

發賣所　東京市牛込區馬場下町二九
振替口座東京六六九八五番　三學社

著作權所有

文學士 鈴木敏也編

國文抄本刊行目次

定價各冊金貳拾錢

東西遊記抄 一冊

常山紀談抄 藩翰譜抄 一冊

上田秋成文抄 一冊

花月草紙抄 一冊

保元平治物語抄 一冊

本居宣長文抄 一冊

平家物語抄 一冊

徒然草抄 一冊

增鏡抄 一冊

近世名家文抄 一冊

近古名文抄 一冊

現代名家文抄（初年級用） 一冊

現代名家文抄（高級用） 一冊

鄭商書院

終